



国民的スポーツ (マレーシア編)

1. はじめに

マレーシアの国民的スポーツ。それはバドミントンです。前号でインドネシアの国民的スポーツがバドミントンであることを紹介しましたが、インドネシアの隣国マレーシアも負けていません。マレーシアにバドミントンを持ち込んだのは、東インド会社の役員たちだと言われています。リゾートとして知られるペナン島に持ち込まれ、またたく間にマレーシア全土に広がりました。ルールは前号でも紹介しましたので、本号では、マレーシアにおけるバドミントン事情に焦点を当てたいと思います。

2. マレーシアで人気の世界大会

マレーシアでも、インドネシアと同様に、バドミントンの世界大会に人々が熱狂します。世界バドミントン連盟(WBF)が主催するチャンピオンシップゲームをはじめとして、トマス杯、ユーザ杯、スディルマンカップ等は、インドネシアに負けない盛り上がりを見せます。

世界大会が始まると、マレーシア人は、夜も眠らずに盛り上がります。マレーシアには、Mamakという24時間営業のレストランがありますが、時差のある国で大会が行われ

る場合、若者は、レストランで食事を取りながら、オールナイトでバドミントンの試合に熱中します。コアなファンの中には、海外遠征する選手を追いかけて、世界中を旅している人もいます。

オリンピックも外せません。メダル獲得数では日本を上回っています。マレーシアは世界第5位。金メダルはまだありません。今夏開催されるリオデジャネイロオリンピックでは、日本と同様に、悲願の金メダルが期待されています

3. マレーシア人にとってのバドミントン

マレーシアは、マレー系、中華系、インド系という3つの民族を主とする多民族国家です。彼らは異なる宗教を崇拝しており、その文化は大きく異なります。クアラルンプールの市内には、狭いエリアの中に、チャイナタウンとインディアンタウンがあり、その周辺にはマレー系のお店が軒を連ねています。

このような空間で暮らすマレーシア人も、ことバドミントンに限っては、自国民を応援するという一つの価値観で結ばれます。つまり、バドミントンは、多民族国家マレーシアにとっての共有資産であり、各民族間の垣根を取り払い民族間の調和を取るツールでもあ

【表1】各国のオリンピックメダル獲得数(出展: Wikipedia)

順位	国名	金メダル	銀メダル	銅メダル	メダル獲得数
1	中国	16	8	14	38
2	韓国	6	7	5	18
・	・	・	・	・	・
5	マレーシア	0	3	2	5
・	・	・	・	・	・
7	日本	0	1	0	1



【写真1】マレーシアのバドミントンコート

るのです。市内のバドミントンコートには、バドミントン好きのマレーシア人が民族問わずに集まります。

4. 人気選手

国内では、バドミントンプレイヤーは、国内で絶大な人気を誇っています。

例えば、リー・チョンウェイ選手。北京オリンピック及びロンドンオリンピックの銀メダリストです。トリックショットを得意としており、マレーシアのオリンピックメダル5個のうちの2個を獲得しています。2016年6月時点で世界ランキング1位。リオデジャネイロオリンピックの金メダル候補として期待されています。

外国人選手も人気があります。例えば、林丹選手（中国）。北京オリンピック及びロンドンオリンピックの金メダリストです。つまり、自国のスター選手であるリー・チョンウェイ選手を2大会連続決勝で打ち破った選手。彼も、マレーシアで大きな人気を誇っています。

また、日本人選手も人気です。特に、女子ダブルスの高橋・松友ペアは人気があります。マレーシアでは、日本文化（料理、ゲーム、コミック等）にはまる人が増えています。クアラルンプール市内のショッピングモールには、「Tokyo Street」という日本のシ



【写真2】トリックショットを繰り出すリー・チョンウェイ選手

ョップ街が盛況です。そんなジャパンプームも手伝って、日本人選手は高い人気を誇っています。

5. むすび

バドミントンは、マレーシアで揺るぎない地位を確立した国民的スポーツです。特に、バドミントンのスピード感がマレーシア人は魅了しているのです。試合会場で生のゲームを観戦するのも一興ですが、私は、テレビ観戦派です。一流選手同士のシャトルの応酬は、私の目には速過ぎるんです…。

著者紹介

Mr. Muhammed Abdul Hakim Azman

PRO IP所属。1990年クアラルンプール生まれ。名前の由来は「アッラーの使い (servant of Allah the Wise)」。マレーシア・サバ大学卒業。専門は電気電子工学。2013年にIPキャリアをスタート。趣味は格闘技、テレビゲーム、マンガ。好きな言葉は「Be Water, My Friend.(by Bruce Lee)」。ブルース・リーとジャパニーズカルチャーをこよなく愛するマレーシアの若手実務家。
<http://www.pro-ip.com.my/>

編訳者紹介

木本大介 (きもと・だいすけ)

日本弁理士、GIP東京所属。1977年神奈川県生まれ。専門は通信、電気、ソフトウェア。2005年弁理士試験合格。企業知財部3年、特許事務所7年の経験を経て2013年7月より現職。モットーは、「正しいモノより楽しいモノを」。

<http://www.giplaw-tokyo.co.jp/jp/>